

哲学史はどこからどこへ

道標としてのヘーゲル哲学史

飯泉 佑介

1. はじめに——哲学史とは何か

哲学史とは、いうまでもなく、「哲学の歴史」である。哲学という知的営みが形成してきた歴史、もしくは、歴史的に登場してきた数々の哲学説は、私たちにとっての研究対象であるだけではない。哲学史は、そこに哲学固有の概念、問題や枠組みなどが由来するかぎり、今日の哲学研究を成り立たせる条件の一つである。しかし、哲学史とは具体的に何のいかなる歴史なのかと問われるならば、この問いに明瞭に答えることは容易ではない。なぜなら、そもそも「歴史的に登場してきた哲学」という名の下で想定される事柄自体が一義的に定まっていなかったからである。哲学を「哲学でないもの」から区別する基準は、そのような区別に無自覚であるような場合を含めて、時代思潮や哲学者によって大きく異なる。それゆえ、哲学史とは何であるかという問いに対する答えは、その都度の歴史的状況にあって哲学に携わる者たちの理解に依存しているように見えるのである。

この点に、数学史や美術史など他のジャンルの歴史記述とは異なる、哲学史に固有の問題を見て取ることができる。すなわち、数と数学者と数学史の関係、美術作品と美術家と美術史の関係より込み入った自己言及的（反省的）関係が生じていると考えられるのである。

本稿では、G. W. F. ヘーゲルによって提示された哲学史の理解がこの問題に対する一つの一貫した回答となりうることを示したい。そして、ヘーゲルの打ち出した回答が、今日の多元的で開放的な哲学史記述の傾向に逆行する性格をもちうるだけでなく、その理解を促進するものともなりうることを明らかにする。形而上学的な哲学体系に基礎付けられた閉鎖的な哲学史観によって悪名高いヘーゲル哲学史ではあるが、その原動力が「哲学（史）とは何か」という自己反省的な問いであったと解釈することで、ヘーゲルの着想が、哲学史を巡る探究にとっての一つの道標であり、今後も道標であり続けることが理解できるようになる。

以下では、初めに今日の通説的な哲学史理解を確認し（2）、次に「哲学史の哲学史」を瞥見することで、哲学史理解の多様性に目を向ける（3）。その上で、ヘーゲルの哲学史講義の序論をもとに、ヘーゲル哲学史を特徴付ける「哲学の歴史性」と「哲学体系による哲学史の基礎付け」について論じる（4）。また、「自己刷新する全体の諸変化」というヘーゲル哲学史のもう一つの側面を検討し、そこにアクチュアルな意義を見出す（5）。一方で、相対主義的な分散傾向を有するこの哲学史理解に対して、「哲学（史）とは何か」という自己反省的な問

いが哲学史記述の中核を占めること、そして、ヘーゲルによる哲学史の哲学的基礎付けの試みはこの問いへの応答であることを最後に指摘する（6）。

2. 哲学史の通説？——今日の哲学史の一側面

改めて「哲学史とは何か」を考えてみたい。哲学史とは、何のどのような歴史なのだろうか。「一般的な哲学史」なるものは存在するのだろうか。ヘーゲル哲学史の特徴を際立たせるためには、まず通説的な哲学史理解とその限界を確認する必要があると思われる。

予め用語を確認しておこう。本稿で「哲学史」ないし「哲学史記述」と呼ぶものは、過去のさまざまな哲学説の相互の連関、および、それを記述したもののことである。哲学が必ずしも「学説」として体系的に語られてきたものばかりでないとすれば、広く哲学的主張や哲学的思考と呼びうるものを含めてよい。ともあれ、この文脈において「哲学史研究」とは、哲学史の範囲や対象、法則や原理、時代区分などについての原理的研究を意味する（①）。それゆえ、「哲学史の哲学」と呼んでも変わるところはない。一方、近年「哲学史研究」という表現によって——「哲学研究」との対比のもと——、歴史的背景のもとで過去の哲学説や哲学的主張を解釈し再構成する研究分野を指すことがある（②）。さらに、そうした解釈や再構成がどのようになされるかということの哲学的考察は「哲学史研究の哲学」とされる。

もっぱら①の考察に注力する本稿では、②の意味での「哲学史研究」や「哲学史研究の哲学」を扱うことはない¹。だが、それは、これらの研究の価値を貶めることを意味しない。むしろ②の「哲学史研究」がなければ、①「哲学史研究」も「哲学史の哲学」も成り立たないことは明白である。ヘーゲルが、アリストテレスの『形而上学』を深く読み込んだ上で、自らの哲学史講義のアリストテレス論を展開したように、いかなる哲学史理解にとっても過去の哲学者の学説や主張を地道に研究することは欠かすことができない。とはいえ、過去の哲学者の主張の解釈や再構成は、それ自体、一つの歴史的連関としての哲学史を記述することではない以上、議論が煩瑣になることを防ぐために、②の「哲学史研究」や「哲学史研究の哲学」に踏み込むことはしない。

さて、振り返ってみるならば、私たちが初めて哲学史と出会うのは、大概、大学での講義やそこで利用される教科書、あるいは、幅広い読者に向けて執筆された教養書や一般書の中である²。そのため、哲学的な問いに強い興味を抱いたり特定の哲学説に入れ込んでいたりしても、哲学史については皆目知らないという人さえ少なくない。特定の哲学的なテーマや問題、また、個々の哲学者の考え方については、より多様な仕方で触れることが一般的であることを

¹ ②の意味での「哲学史研究」や「哲学史研究の哲学」については、2017年の日本哲学会大会のシンポジウム「哲学史研究の哲学的意義とはなにか？」で植村玄輝が論じたものが記憶に新しい（植村 2017, 28-29）。

² 近年では、インターネットを介したメディアやコミュニケーションの多様化により、書籍ではなく、記事サイトや動画サイト、音声メディアを通じて哲学史と出会う人が増えていると推測される。

考慮すると、この事実は興味深い。

そこで、近年刊行された一般書に目を向けてみると、さまざまな「〇〇（の）哲学史」というタイトルの書籍が書店を賑わしていることに気付く。例えば、『アメリカ哲学史：一七二〇年から二〇〇〇年まで』（ブルース・ククリック著、勁草書房、2020年）、『自由意志の向こう側：決定論をめぐる哲学史』（木島泰三著、講談社、2020年）、『アフリカ哲学全史』（河野哲也著、筑摩書房、2024年）といった書籍である。これらは、その名称からも明らかなように、特定の地域や思潮、特定の問題（概念）に特化した哲学史を主題としている。一方、日本で大学教育を受けた多くの人々にとって「哲学史」と聞いて想起される歴史は、やはり「西洋哲学史」だろう。典型例として、最新の参考書である『新しく学ぶ西洋哲学史』（ミネルヴァ書房、2024年）を見てみよう。そこでは、「第I部 古代ギリシア・ローマの哲学」「第II部 中世哲学」「第III部 近代の哲学」「第IV部 現代の哲学」という時代と地域の区分が採用されている。下位区分には、「アリストテレス」「カントの哲学」のように哲学者個人の名前が付された章もあれば、「ヘレニズムの哲学」「盛期スコラ哲学」「一八世紀啓蒙の哲学」などの思想潮流、「初期ギリシア哲学の誕生」「19世紀の哲学」「論理学革命前夜の英語圏の哲学」などの時代と地域によって限定された章もある。

〈古代ギリシア・ローマ→中世哲学→近代哲学→現代哲学〉という大枠の構図は、本邦で主流とされる哲学教育や研究の中で見慣れたものである。だが、その下位区分までよく見てみるならば、何の限定も付されないただの「哲学史」さえ、実際には特定の地域や問題と深く結び付いていることがわかる。しばしば指摘されるように、このような構図を取る哲学史理解は、それ自体、18世紀末から19世紀初頭にかけてのドイツという特定の時代と地域において登場してきた考え方を起源期限とする。福谷によれば、カントによって切り開かれたこの哲学史観の特徴は二つある。すなわち、1) 古代ギリシアが排他的な地位をもち、2) そのような古代と近代が直接に結び付けられる、という点である（福谷 2004, 40）。福谷が強調するように、こうした哲学史は、すでに批判期のカントが「まず手本と論理とを示している」（福谷 2004, 40）ものの、19世紀に入り、ヘーゲルによって「ヘーゲル以前の哲学史に関しては比類のない強力な図式が与えられたことは疑えない」（福谷 2004, 34.）。後述するように、こうしたカントやヘーゲルの図式が、ヘーゲル学派の中央派とその流れを汲む20世紀の新カント派の哲学史家たちの仕事によって世界的に普及するのである。その後、いうまでもなく、古代と近代の間にある「中世」哲学の評価が高まり、また、近代の後に「現代」の哲学が位置付けられることで、私たちがよく目にする「西洋哲学史」が成立する。

このような西洋哲学史の大まかな時代区分と展開については、西欧から *philosophy* を導入した明治初期の本邦でも受け入れられた³。確かに日本における最初の哲学史記述を含む西周の『百学連環』（1870年）は、おそらく G. H. ルイスの『付伝哲学史』を参考にしつつ、A. コントや J. S. ミルを頂点とする三段階の発展論によって哲学史を把握しているが、後世に多大な影響を

³ 以下は、藤田（2008, 87-98）に基づく。また、柴田（1997, 72-103）も参照。

与えた A. フェノロサの哲学史講義は、ドイツの近代哲学、とりわけヘーゲル哲学（およびスペンサーの進化論哲学）に力点を置いていたことが知られている。その後、ヘーゲル学派中央派の F. K. A. シュヴェーグラーと K. フィッシャーの著作を手がかりとした三宅雪嶺の『哲学涓滴』（1889 年）が初めて西洋近代哲学史を詳細に論じ、以来、1890 年代以降はドイツの哲学史理解が日本の哲学史教育・研究の基礎を形作ったとされる。

ただし、ここで取り上げた『新しく学ぶ西洋哲学史』の場合、標準的な「西洋哲学史」の見立てそのものに批判的な目線が向けられていることを看過してはならない。プラトン哲学・教父哲学の研究者である荻野弘之は、1) 〈古代→中世→近代→現代〉という構図が「あくまで現代からの視点」であること、2) 政治史の時代区分に対応しているものの、必ずしも政治史と文化史は連動するわけではないこと、3) 哲学者や思潮の配置は時間軸に沿わない場合があることを指摘した上で、西洋哲学史が「常に書き換えられる可能性を残している」と主張している（荻野 2023, 3-6）。通説とされてきた哲学史理解が必ずしも自明ではなく、それどころか「哲学史の通説」というものが成り立つかどうかさえ不明であることは、今日、哲学史とは何かを問うための出発点だといってよい。

3. 哲学史の歴史と現在——「哲学史の哲学史」概観

哲学史の内実が一義的に定まらないことは、哲学史についての多様な理解の歴史、いわゆる「哲学史の哲学史」を一瞥しても合点がいくと思われる⁴。最初に登場した哲学史記述は、「学説史 (doxography)」と称される。アリストテレスの『形而上学』A 巻、弟子テオフラストスの『自然学者の学説』のように、過去の哲学者たちの学説を列挙し、年代記的に序列化した記述である。今日でも、教科書として使用される「哲学史」はこのスタイルに準拠することが多い。次に、哲学者の生涯や逸話を扱った評伝というスタイルが現れる。ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』（3 世紀前半）は、学説と評伝を組み合わせた手法で、長い間、哲学史家たちの着想源となってきた。一方、古代から近代までという通史的な哲学史が登場したのは、当然、近代に入ってからである。だが、現代の哲学史理解の原型ともいえるこの種の哲学史は、当初から同時代を評価していたわけではなかった。哲学説の歴史的連関を初めて体系的に示したとされる E. スタンレーによる『哲学史』（1655 年）さえ、ソクラテス以前の哲学に始まる古代哲学の記述に尽きる。古代から近代までという哲学史記述の成立には、同時代としての「近代性 (modernity)」の自覚が不可欠だったのである。

ところで、「学問としての哲学史」が登場したのは、18 世紀である。J.J. ブルッカーの著した『哲学の批判的歴史』（全 5 巻、1742-44 年）は、啓蒙主義的な進歩史観のもと、学説史に時代区分を導入したことによって哲学史理解に転換をもたらした。さらに、カントによる「哲学革命」が哲学界を席卷した 1790 年代のドイツでは、D. ティーデマンの『思弁哲学の精神』（全

⁴ 以下の論述は、Geldsetzer (1968) と柴田 (1997) の整理に基づく。

6巻、1791-97年)などの重要な哲学史の書籍が数多く刊行された上に、ドイツ哲学史論争が生じる。とりわけ重要なのは、カント哲学の最初期の紹介者としても知られる K.L. ラインホルトの論文「哲学史の概念について」(1791年)である。G. G. フェルボルン編纂の論文集『哲学史への寄与』(1791-99年)に収められたこの論文によれば、これまで哲学史が哲学者の評伝や人間精神の歴史などと混同されてきたのは、そもそも哲学の概念についての合意がなかったからである(Reinhold 1968, 10)。ラインホルト自身による哲学の定義は、カント主義の色合いが強い時期だけあって、「経験から独立した特定の諸連関の学」(Reinhold 1968, 15)とされるが、そこから「物の必然的諸連関の学がその成立から我々の時代まで経験してきた、諸変化の叙述された総体」(Reinhold 1968, 20)という哲学史の定義が導き出される。ラインホルトの議論の説得力は別にしても、この論文において哲学と哲学史との結び付きが明確に問題視され、哲学による哲学史の基礎付けが示唆されたことにより、その後、J.G. フィヒテや W.G. テンネマン、J. C. A. グローマンらを巻き込む論争が引き起こされたのである。

1800年代以降は、F. シュレーゲルや F. W. J. シェリングをはじめとしたロマン主義者の哲学史理解も見落とすことはできない。歴史上の諸哲学は互いに有機的に連関しており、一つの生きた「哲学」を形作るという彼らの主張は、次節で論じるように、ヘーゲルの哲学史理解にも決定的な影響を与えた。加えて、20世紀初頭のドイツでも、新カント派や新ヘーゲル主義がさまざまな哲学史観を提示し「第二の哲学史論争」と呼びうる状況が出来するが、本稿では、これ以上「哲学史の哲学史」の細部に立ち入るのは控えたい。翻って最後に、21世紀の現代における哲学史の理解を瞥見しておこう。

周知のように、今日では通説的な哲学史を相対化・複線化する哲学史記述の試みが増えている。それは、女性であることや非白人であることなど哲学の担い手である哲学者の属性に注目し、西洋の白人中心の哲学史に対する明確な批判や対抗を含意した試みである。ここでは、二つのプロジェクトを紹介しておこう。

一つ目は、ヒルデスハイム大学の「コゼレック・プロジェクト」(2019-24年)である。「概念史」の提唱者として知られる歴史学者 R. コゼレックの名前を冠したこのプロジェクトは、Histories of Philosophy in a Global Perspective というサブタイトルにあるように、グローバルな観点から「哲学史」の再構築を目指している⁵。18世紀末以降、「哲学史」から非ヨーロッパ地域の思想史が排除され、インド学や中国学などの言語学として独立した過程の研究、また、20世紀以降、哲学が学術分野として世界的に制度化される過程の研究などなる大規模な共同研究である。研究対象がグローバルなだけでなく、研究体制がグローバルで分野越境的であることも特徴としており、その研究成果の一端は、26言語の各国・地域で刊行された「哲学史」の著作データベースの作成・公開に表れている。

⁵ コゼレック・プロジェクトは2024年に終了しているが、その趣旨や活動成果はサイトで確認することができる。Rolf Elberfeld, *Histories of Philosophy in Global Perspective*, Reinhart Koselleck-Project, April 1st, 2019-March 31st, 2024, Funded by the German Research Foundation (DFG), <https://www.uni-hildesheim.de/histories-of-philosophy/>

もう一つの事例は、女性哲学者たちの哲学史研究である。2021年に刊行された『長い19世紀の女性哲学者たち』は、ド・スタール、カロリーネ・v・ギュンターローデ、ルー・ザロメラ、19世紀のドイツ語圏で活躍した9名の女性哲学者たちを包括的に研究した論文集である。ここに所収された論文は、哲学の担い手だけでなく、哲学を表現し伝える媒体の多様性も考慮している。すなわち、書簡、手記、戯曲といった非典型的な媒体をメタ哲学的に問い直しており、そうすることによって哲学の境界線を非西欧圏にまで拡張することを目指している⁶。

このような新たな哲学史記述の試みは、単にこれまで無視あるいは軽視されてきた多様な哲学の担い手を取り込んでいるだけではない。それは、西洋哲学の中で培われてきた哲学の定義を揺るがし、哲学史の標準的な理解に根本的な疑義を突き付けているといえる。このような現状を踏まえると、そもそも一般的な仕方で「哲学史」を規定すること自体が困難なのではないか、という疑念が生じてくるかもしれない⁷。数ある歴史上の思想、言説や主張の中から「哲学史」を取り出すとしても、その基準となる「哲学」の理解そのものが変容してきたし、変容しうるからである。しかも、そのことは、現代の最先端の哲学史研究からのみならず、カントやヘーゲル以前の哲学史からも導き出される視座なのである⁸。

4. ヘーゲル哲学史の特徴——哲学の歴史性と哲学的基礎付け

それでは、このような哲学史記述に対して、「ヘーゲル哲学史」とはどのような哲学史理解であり、どのような意義をもつのだろうか。すでに見てきたように、古代ギリシア哲学と近代哲学を結び付け、それ以外の地域や時代を排除する哲学史を確立した立役者の一人がヘーゲルであることは否定しがたい。そのヘーゲルをわざわざ取り上げることは、伝統的な哲学史理解を復活させようとする意図以外に何がありうるのだろうか。

本節ではヘーゲル哲学史を二つの観点から特徴付けるが、その前に文献学的事実を確認しておきたい。まず重要な点は、今日、国内外で流通している「ヘーゲル著『哲学史講義』」は実際にはヘーゲルの著作ではない、ということである。ヘーゲルが、公の場で哲学史についてまとめた仕方で論じたのは、イエナ大学での1期分の講義、ハイデルベルク大学で2期分の講義、ベルリン大学で7期分の講義に限られる。それに対して、いわゆる『哲学史講義』（1833-

⁶ この論文集の内容や意義について、詳しくは八幡（2025年）を参照。

⁷ 今日の哲学史研究では、女性や非白人などさまざまな属性をもつ個人を「哲学史の担い手」と見なしているが、そのこと自体、決して自明ではない。L. ゲルトゼッツァーが詳しく論じているように、歴史的には、精神、理性、学派、文化、教養段階、経済的基盤、人格なども「哲学史の担い手」と考えられてきた（Geldsetzer 1968, 154-174）。むしろ人間の個人に限定しない考え方の方が主流だったのではないかとさえ思われる。

⁸ 例えば、前述のブルッカーによる別の著作『哲学史からの簡易的な問題』（1731-36年）では、「中国の哲学」と並んで「日本の哲学」が挙げられている（Brucker 1736, 1194-1204）。実質的には神道や仏教の思想の不十分な概説以上のものではないにせよ、「哲学」の範囲に江戸時代以前の日本の思想が含まれていることは、少なからず私たちを驚かせる。

36年)は、弟子のC. L. ミヘレット(ミシュレ)が、自筆講義草稿やメモ、また、複数年度に渡る受講学生の筆記録をもとに大幅に再構成しながら編纂したものとされる。そこで、本節では、どの草稿や講義録のどの箇所がいつの講義に対応するかを分析し、年度毎に異なる哲学史講義を再構成したイェシュケ版講義録選集を底本とする。

ただし、年度や記録者によって異なる哲学史講義録の細部を検討することは、本稿の課題ではない。哲学史を再考するための手がかりとなる「ヘーゲル哲学史」を浮かび上がらせるためであれば、各年度の講義の冒頭に付された序論を参照するだけで十分である。

4.1. 哲学の歴史性——精神の自己産出と自己知について

さて、ヘーゲル哲学史の一つ目の特徴は、哲学が歴史的に形成され継承されたもの、その意味で精神の自己産出と自己知の一つの形式であること、と考えられていることである。本稿の冒頭でも示したように、歴史的観点からすれば、私たちが触れている「哲学」は、何にせよ、これまでの哲学者たちの営みの結果である。1820年哲学史講義でヘーゲルは、次のように語っている。

我々が歴史的にそうであるところのもの、我々に、つまり、現在の世界に属している所有物は、直接的に成立したのではないし、現代の土壤からのみ成長したのではない。この所有物は、〔これまでの〕労苦が残した遺産であり、しかも人類のあらゆる先行する世代の労苦である。〔…〕外的な生命である芸術と同様に〔…〕、我々が学問において、より詳細に言えば、哲学においてそうであるところのものは、あらゆる移ろいやすいもの、それゆえ過ぎ去ったものを貫いて、聖なる鎖として巻き付いている伝統に負わざるをえない。それは、先行する世界が自らもたらし、我々に残し継承してくれたものなのである。(V6, 6-7)

独特な表現が用いられているものの、語られている事柄は難解ではない。哲学は、今の時代に突然発生したものではなく、先行する哲学者たちの仕事を通じて生み出され、歴史的に継承されてきた、というのである。この意味で、哲学は歴史的に形成されたものだといえる。

重要なことは、ヘーゲルの主張が、ただ過去の哲学の歴史的連関を捉えているだけでなく、現在の「我々」との関係にも注意を向けている点である。冒頭の「我々が歴史的にそうであるところのもの」は、「我々」を「我々」足らしめている知識、習慣、文化、価値観などが「人類のあらゆる先行する世代の苦勞」によって成り立っていることを意味する。『精神現象学』(1807年)の序説ですでにヘーゲルは、先人の労苦にとって形成されてきた歴史的所産を「普遍的精神がすでに獲得した所有物」と呼び、近代の個人にはそれが自明の「実体」となっていると指摘していた(GW9, 24-25)。ヘーゲルによれば、このことは、広く一般に「我々」近代人(現代人)に当てはまる事態である。一方、「我々が学問において、より詳細に言えば、哲学にお

いてそうであるところのもの」は、哲学に携わるかぎりの「我々」が想定されていると考えられる。現代の「我々」が携わる哲学も、多分に歴史的に形成された哲学の諸要素を継承することによって成り立っているのである⁹。

このような哲学の営みにおける歴史性への深い洞察は、より一般化すれば、20世紀に入って M. ハイデガーや G. ガダマーによって発掘された問題系に帰属すると考えられる。実際、O. ペゲラーは、第一次世界大戦後にディルタイやヨルク、ハイデガーらによって提起された「哲学の歴史性」という問題について、それを初めて「問うに値する難問」と解したのはヘーゲルであると主張している (Pöggeler 1993, 305-306.)。さらに、W. イェシュケによれば、ヘーゲルこそが「精神的であること」と「歴史的であること」を最初に結び付けた哲学者である (Jaeschke 2003, 198)。このとき、「精神 (Geist)」という表現が使われているからといって、時代を超えた形而上学的主体を想定する必要はない。上記の引用文でも示唆されているように、哲学を含む知識、習慣、文化、価値観、とりわけ芸術や宗教などは、ある共同体の特定の世代によって生み出された産物であるとともに、後続する世代によって受容され継承され、再び生み直されるものでもある。このような歴史を通じた産出の過程こそ、ヘーゲル的な「精神の自己産出性」が意味するところであり、この産出を通じて共同体や世代が自己認識をもつことは「精神の自己知」と呼ばれる (cf. Jaeschke 2003, 350-353)。ここには、一種の解釈学的循環を伴う歴史性の理解を見出すことができるだろう。

しかしながら、哲学が精神の歴史的産物であるというだけでは、ヘーゲルがもう一つ重視する哲学史のメルクマール、つまり、哲学史の学問性が保証されることはない。そもそも歴史性を本質とする「精神の活動」は哲学だけではなく、上記の引用文で言及されるように、芸術も同様である。哲学を芸術から区別するためには、哲学の内面性、つまり、哲学が「思考されたもの (Gedanke; 思想)」によって形作られている点を押さえなければならない。芸術作品が目で見えたり耳で聞こえたりするという仕方で〈外に現れる〉のに対して、思考と概念の営みである哲学は「内的な生命」である。そして、この観点を踏まえて、哲学体系と哲学史との独自の連関に焦点が当てられることになる。

4.2. 哲学史と哲学体系——ヘーゲルの「論理＝歴史並行論」

ヘーゲル哲学史を特徴付ける第二の主張は、哲学史は体系的な仕方で展開しており、そのかぎり必然的な過程として記述されなければならない、というものである。これに対置させられるのは、哲学史を偶然的産物と見なす立場である。なるほど、哲学史が、その時々有力な哲

⁹ 納富は、philosophia や concept などの「概念」、心身問題や自由意志などの「問題」、そして、ギリシア哲学や近代哲学などの「枠組み」という三つのレベルで私たちが哲学史を受け継いでおり、私たちにとっての「思索の場」を形作っていると指摘する (納富 2017, 49-51)。philosophia と呼ばれてきた知的営みの歴史が、過去の思想を任意に組み合わせたものではなく、明治以来、西洋哲学を受容してきた「我々」にとって基盤をなしていると考えすることは決して奇妙な見立てではない。

学が興隆しては没落するだけのランダムな過程にすぎないとすれば、それほど哲学的真理とほど遠いものはない。ヘーゲルによれば、哲学が「民衆や個人に対して物語られる時代の偶然的な出来事」、つまり、歴史の命運によって左右される「偶然的な思想」あるいは「意見」と理解されるかぎり、哲学史は「哲学的意見の在庫」にすぎない（V6, 15）。人口に膾炙したヘーゲルの表現を用いるならば、まさに「愚者の画廊」（V6, 16）である。

しかし、ヘーゲルの考えでは、哲学史は、偶然的な意見の寄せ集めとは反対に、堅牢な学問的必然性を備えているはずである。ここでの学問性の根拠は、今日考えられるような文献学的手続きや経験科学的実証性、反証可能性ではない。ヘーゲルにとって本来の学問は「哲学」、つまり、「哲学的諸学問」のみであり、その学問性はさまざまな学問領域の総体が体系的に統一されていることに存する（GW20, 56-58, cf. GW9, 429）。それゆえ、哲学史記述が学問性を備えたとしたら、歴史上の諸哲学が相互に関連し、一つの体系を形作っていることのうちにあると考えられなければならない。

このようなヘーゲル哲学独特の体系性は、哲学史の特徴を論じた文脈で次のように語られる。「生きているもの、精神的なものだけが運動し、自らのうちで動き展開する。こうして理念は、それ自体において具体的であり、展開するものであり、有機的体系であり、諸段階と諸契機の富を自分自身のうちに含む総体性である」（1820年講義、V6, 24）。諸哲学が一つの体系を形作るとは、それらが、まるで一つの生命体にとっての諸器官のように、互いに有機的に関連し合い、その全体が動的に展開するものであることを意味する。このとき、体系的に関連付けられて記述されるすべての過去の哲学は、哲学史という全体を成り立たせるために不可欠な契機である。それゆえ、そのような哲学史とは、諸哲学を成立年代順に列挙した学説史や後世の哲学による受容を捉えた影響作用史でないのはもちろん、それぞれの学説や主張の共通項を抽出し、特定の観点から整理して統合したり構造的に再構成したりした理論でさえない。「哲学史は、現象する多様な諸哲学において、一方では、さまざまな発展段階にあるただ一つだけの哲学を示し、他方で、そのそれぞれが〔哲学〕体系の根底に存するような特殊な諸原理が、一にして同じ全体の分枝にすぎないことを示す」（GW20, 54-55）。部分と全体が漏れなく合致した完璧な総体的体系は、実際の記述においては複数の試みがなされるとしても、原理的には唯一無二でなければならないのである。

そのような体系性を可能にするものごとを、ヘーゲルは「理念（Idee）」と呼んでいる。ヘーゲルの「理念」とは、民主主義の理念や企業理念などとは異なり、唯一無二の「絶対的理念」であり、「哲学の唯一の対象と内容」、「自らのうちにあらゆる規定性を含む」ものである（GW12, 236）。それゆえ、哲学史が学問性を備えているといえるためには、必ず「理念」の哲学体系、つまり、諸規定性の総体に対応している必要がある。

哲学史と哲学体系との対応関係についてさらに検討する前に、一つ確認すべき点がある。これまでの議論を踏まえると意外な印象をもつかもしいが、ヘーゲルは、歴史上の諸哲学の登場それ自体が、不可避の必然性を備えているとは考えていない。例えば、ある哲学者が著書

で一つの哲学説を提示し、それがきっかけとなって、後年一つの学派が形成されたとしよう。このような一つ一つの歴史的出来事としての「哲学」は、当然ながら限りなく多様で分散的であり、その成立条件における偶然的要素を完全に払拭することは不可能である。そのことは、哲学は「その時代を諸思想のうちに捉える」（GW14, 1, 15）と考えるヘーゲル自身、重々承知している。だが、ヘーゲルによれば、偶然性に付きまといわれているのは、時間の中に現れたかぎりの哲学体系、すなわち、その外面性や現象である。「哲学史は概念によって規定され、哲学体系がその外面的側面において叙述されたものであり、両者の違いは、「哲学〔を構成する諸契機〕の継起が偶然性として現象してくることにある」（1819年講義、V6, 117）。したがって、あくまで哲学的な思考の上で、歴史上の諸哲学の外面性ないし偶然性を除外するならば、諸哲学の展開は必然的な体系に沿うはずだと考えられるのである。

その際、「理念」の哲学体系とその外面性である哲学史は、ただ漫然と対応するわけではない。ヘーゲルによれば、哲学体系と哲学史はそれぞれの諸契機の系列が対応する、より厳密にいうと、諸哲学の歴史的継起がヘーゲルの論理学で叙述される諸概念の継起に対応するというのである。「歴史における諸々の哲学体系の継起的順序は、理念の概念諸規定が論理的に導出されるときに継起的順序と同じである」（V6, 27）。「理念の概念諸規定が論理的に導出される」とは、ヘーゲル哲学体系の第一部を占める論理学、つまり、カントの諸カテゴリーや伝統的な形而上学の諸概念を体系的に再構成したヘーゲル独自の論理学の展開のことを指している。ヘーゲルによれば、論理学は「思考についての思考」であり、思考諸規定としての諸概念を叙述しているが、例えば、『大論理学』（1812-16/31年）の存在論では、「存在（Sein）」という概念にパルメニデス、「生成（Werden）」という概念にヘラクレイトスが対応させられている（GW21, 70-71）。

以上をまとめるならば、歴史上の諸哲学は「理念」の哲学体系が外面的に現象したものであり、それが論理学における諸概念に対応するかぎり、必然的な体系性を備えることになる。このようないわゆる「論理＝歴史平行論」（Jaeschke 2003, 480）は、不思議なことに実際の哲学史講義で明示的に論じられることは少ないものの、ヘーゲル哲学史の最大の特徴の一つであることに変わりはないのである。

5. ヘーゲル哲学史の洞察——自己刷新する哲学史

前節では、ヘーゲル哲学史を、哲学の歴史性と哲学史の体系性という二つの視点から特徴付けてきた。ヘーゲルは哲学史を、歴史的に生み出され継承されたものと見なし、それを精神の自己産出性と自己知という観点から捉えていた。また、哲学史は体系的な仕方で展開し、必然的な過程として記述されなければならないとも考えられていた。

さて、このようなヘーゲル哲学史を、私たちはどのように受け止めたらよいのだろうか。哲学の歴史性については、精神という用語こそ馴染みがないとはいえ、20世紀のハイデガーやガ

ダマーにも通じる豊かな含蓄を伴っていることが推察される。問題は、哲学史の体系性である。実際、「論理＝歴史並行論」は、その登場以来、絶えず批判に晒されてきた¹⁰。ヘーゲルが古代から近代にいたる膨大な哲学説にどの程度精通していたのか、また、論理学に対応した総体的な哲学史を本当に記述しえたのかといった点は脇に置くとしよう。それでも、そうした実行可能性以前に、哲学史の記述を哲学体系によっていわば基礎付けるという発想そのものが、具体的な歴史記述にとっては重大な障害となりかねない。例えば、論理学の諸概念に対応しない特定の哲学を哲学史から排除してしまう可能性や、一部の哲学をその成立時期を歪曲してでも哲学史に組み込もうとするリスクは、容易に思い至る¹¹。さらに、哲学史は一つの総体的で有機的な体系でなければならない、という見立てそのものに対する批判も想定できる。第一節で見てきたように、今日の哲学史記述の傾向が、より多元的で複線的な「開かれた哲学史」へと向かっていることを考慮すれば、ヘーゲル哲学史はやはり、時代遅れどころか、時代に逆行する反動的な傾向をもつ思想にすぎないように見える。

しかし、本節では、ヘーゲル哲学史がもう一つの顔を備えていることに着目したい。それは、ヘーゲルのいうところの「自らを刷新する全体の諸変化」としての哲学史である。この見方が、哲学（史）の規定さえ変転しうる歴史という観点を含んでいるとしたら、ヘーゲル哲学史は、先ほどまでの評価とは反対に、極めてラディカルな開放性をもちうることになる。「論理＝歴史並行論」に集約される哲学史の哲学的基礎付けに対するヘーゲルの執着は、このような開放性ととも理解されなければならない。そこで、まず本節では「自らを刷新する全体の諸変化」という哲学史理解の内実を確認し、次節で改めて哲学史の基礎付けの意義を考察することとする。

「自らを刷新する全体の諸変化」という表現が登場するのは、1823年哲学史講義である。この講義の序論でヘーゲルは、他の学問や宗教の歴史と対比しつつ、哲学史に固有な特性を論じている。すなわち、哲学は、他の学問や宗教と同じように、特定の状況下で成立し、拡大や興隆、没落や再興などの過程を伴うという意味で「外面的歴史」をもっている。しかし、内容の観点から考えると、不変的真理を対象とする宗教（キリスト教）は本質的に歴史的ではない。一方、その他の学問（鉱物学、植物学、数学）は、確かに歴史をもつものの、一部の命題が放棄されたり新しい知識が増加・追加されたりするだけで、以前に獲得したものが変化することはなかった（1823年草稿, V6, 11-12）。

キリスト教にとっての真理の非歴史性や自然科学の不変性という見方の妥当性については、

¹⁰ この点については、例えば、『哲学史概説』（邦訳『西洋哲学史』）を執筆した、ヘーゲル学派を継承する哲学史家 F. K. A. シュヴェーグラーさえ論難している（Schwegler 1868, 3-5）。

¹¹ ヘーゲルについての翻訳書や著作を執筆している熊野は、次のように指摘している。「ヘーゲルは新プラトン主義以外のヘレニズム文献を明らかに軽視していて、あれは哲学ではない、という扱いをしている。それから、中世の明らかな軽視ですね。この二点がヘーゲルの哲学史の功罪の罪のほうだと思います」（神崎、鈴木、熊野 2008, 62）。

ここでは検討しない。重要なことは、少なくともヘーゲルは哲学史に対して、他の学問や宗教にはない根本的な変化を見てとっているという点である。

それに対して哲学は、追加のないより単純な内容に固執することではなく、すでに獲得された財産に新しい財産を静かに継ぎ足す過程にすぎないものでもなく、むしろ**もっぱら常に自らを刷新する全体の諸変化**という演劇 (Schauspiel) であるように見える。この諸変化は、結局もはや〔さまざまな哲学の〕共通の紐帯という単なる目標をもつことさえない。むしろそのような目標は、抽象的な対象であり、消え失せる理性的認識である。〔哲学史という〕学問の構築は、最終的に、〔目標という〕空虚な場所とともに、哲学であるという思い上がりで虚しくなった名前を分かち合わなければならない。(V6, 11-12; 太字は引用者)

この引用文ではまず、哲学(史)が「演劇」と称されているところに目を奪われる。しかし、「演劇」という表現は1820年講義でも用いられており、哲学史が「時間の中で、出来事という仕方において」、つまり「この経験的形式のもとで」出現していることを表しているにすぎない(V6, 26-27)。それに対して、哲学史の特徴を際立たせるのは、それが「もっぱら常に自らを刷新する全体の諸変化」と呼ばれていることである。注意すべきは、ただの「全体の諸変化」ではなく、そうした変化が「自らを刷新する」と言われている点である。ここには、ある時代から別の時代への変化に留まることはなく、その変化の仕方そのものが刷新される、いわば自己反省的な変容の契機を看取することができる。

引用文の後半を見てみよう。この個所の文意は直ちには理解しがたいものの、ヘーゲルが、自己刷新する変化の根底に不変的な「基体」や「目標」を認めていないことだけは確かである。具体的にいえば、さまざまな哲学の栄枯盛衰がそこに集約される「理想」としての〈哲学〉、あるいは、抽象的な類概念としての〈哲学〉などを想定することはできない。いや、そのように想定したとしても、そのときの〈哲学〉とは、ただの「哲学であるという思い上がりで虚しくなった名前」にすぎない¹²。ヘーゲル最初の哲学論文である『差異論文』(1801年)ではすでに、真の哲学体系が成立するまで哲学史はさまざまな哲学的立場の対立状況にあると見なされることを指摘していたが(cf. GW4, 12-13)、後年の哲学史講義でも同じような事態が想定されていると考えられる。

だが、このような視点は、第二節で論じた現代の哲学史理解、つまり、哲学の定義の揺らぎ

¹² ヘーゲル哲学研究者の三重野は、「論理＝歴史並行論」というヘーゲル哲学史の形而上学的前提を、歴史記述に対して同一的主体ないし統一を仮説的に認めるという「方法論的要請」に読み替えているが、この再解釈は、三重野自身が述べているように、エルンスト・カッシーラーの『認識問題』から手掛かりを得ている(三重野2022, 64-65)。カッシーラーのこの戦略は明らかにカントの「統制的理念」に範を取っており、「自己刷新する諸変化」に見られるヘーゲル哲学史の一面とは異なるベクトルをもっているといわざるをえない。

とともに、哲学史の担い手や範囲が多様化し拡張し続けている哲学史のイメージに合致するのではないだろうか。というのも、引用文を素直に理解するかぎり、ヘーゲルは、興隆しては衰退する多様な哲学の歴史の中に、唯一無二の〈哲学〉という基準を持ち込むことを拒否しているからである。この見地からすれば、哲学史の理解そのものが反省的に相対化され、時代に応じて変容しうることも認められるだろう。その見方は、例えば、体系哲学者ヘーゲルとは反対の立ち位置にいるとされる R. ローティの主張にむしろ近い。哲学の基礎的問題や「正典-形成 (canon-formation)」が文脈主義的な意味で歴史的に再構成されることを肯定するローティは哲学史を「自然種ではない」と強調してやまないが (Rorty 1984, 63-64)、ヘーゲルの考え方でも、哲学史は固定的ではなく、その内実が変転しうる余地を存分に残しているのである¹³。

無論、ヘーゲルの理解する「自己刷新する哲学史」がそのまま現代的な哲学史観を反映しているというわけではない。例えば、ヘーゲルにとっては、哲学の歴史が古代ギリシアと近代の西ヨーロッパの男性哲学者を担い手とするという前提は覆されておらず、非ヨーロッパ圏の思想が取り上げられる際は、哲学「以前」の宗教という位置付けを変えることはない。何より「自己刷新する哲学史」をまさに精確且つ十全な仕方で捉えたものこそ、諸哲学の総体を有機的で動的な体系として統一的に記述した哲学史であると、ヘーゲルは考えている。上記の引用文は、諸哲学から取り出され、抽象的な理想として作り出された「哲学」の空虚さを批判する一方、「哲学史という学問の構築」、つまり、「理念」の哲学体系による基礎付けを否定するものではないのである。

それでも、ヘーゲル哲学史の潜在的な意義という点において、ここにアクチュアリティを見出すことは可能である。「自己刷新する諸変化としての哲学史」という発想の根幹には、ヘーゲル哲学(史)をも相対化する視点が含まれていると考えられるからである。ヘーゲル哲学史には、哲学史そのものの理解を含めて、さまざまな哲学を一つの立場に還元したり共通の概念へと抽象化したりすることを防ぐという側面がある。そのかぎり、今日の哲学史研究が求める多元的で複線的な哲学史記述への傾向に適合しうるのである。

6. 自己反省する哲学史——哲学史の基礎付けの意義

前節では、ヘーゲルの主張する「自己刷新する哲学史」が含意するラディカルな可能性に注目し、それが反ヘーゲル的な現代の哲学史理解と重なる観点を示した。しかし、この方向性は、いかなる意味での哲学史も無条件で受け入れることを意味するのではない。もしただ現状を追認するだけの見方であれば、規範性を伴う「哲学史の哲学」を追究しているとはいえないだろう。

¹³ ただし、他方でローティは、「精神史 (Geistesgeschichte)」において新しい世代が過去の哲学者より「良い」問題を立てる可能性を指摘している (Rorty 1984, 63)。ここには、哲学史を「不断の改良」と見なす立場を批判するヘーゲルと異なり、ローティのプラグマティスト的な一面が表れているといえる。

では、「自己刷新する哲学史」というヘーゲルの主張からは、具体的にどのような〈あるべき〉哲学史像が見えてくるのだろうか。ラディカルな意味での哲学史が、哲学史や哲学そのものの規定さえ変転させる自己反省的な歴史であるとするならば、そこから次のような洞察が浮かび上がってくる。すなわち、このような自己反省的な問いこそが、哲学史を哲学史足らしめる核心を占めている、ということである¹⁴。限りなく多元化し拡張する哲学史において、「哲学とは何か」という問いは、その周りを巡って個別の哲学史研究が推し進められる軸となる。そして、この問いへの応答こそ、ヘーゲルが哲学史を哲学体系に基礎付けようとしたことの意義だと考えられる。ヘーゲルは「理念」の哲学体系を叙述するによって「哲学とは何か」への回答を示すとともに、さまざまな歴史上の諸哲学が形成してきた興隆と没落の歴史を叙述することによって、最終的に自らが確立した「学問としての哲学」が哲学史の到達点であることを暗示している。ここに、目的論的な歴史観を看取り、その強引さを非難することほど安易な反応はない。肝要なことは、哲学史に見て取られる精神の自己知という視点がまさに哲学に固有の自己反省性を表現している、ということである。ヘーゲルは、自己反省性や自己知という観点から哲学史を形成する原理となることを自覚し、その視座を哲学史記述の方法的な前提として取り込んでいるのである。

もちろん、このような考え方に対しては直ちにいくつかの異論が提示されるだろう。まず、今日、歴史に名を残す哲学者たちでさえ、誰もが「哲学とは何か」という問いを明示的に問うていたわけではない。ましてや、西洋哲学の範型とされている古代ギリシアでは、哲学史が主題的なテーマとされることさえなかった。確かにアリストテレスにはすでにその片鱗はあるものの、学問的に主題化される「哲学史」が近代の産物であることはすでに第2節で述べたとおりである。

しかし、過去の哲学説や哲学的主張を歴史的連関の中で記述することの意味を考慮するならば、哲学にとって哲学やその歴史を究明することは自己や原理への問いと重なることに気付くに違いない。端的に言えば、哲学とその歴史への問いは、哲学する私たちや哲学的思考の原理への問いでもある。このように考えられるならば、自己や原理を探究する思想は数多くの文明に見出されるとはいえ、その独自の徹底性のもと、潜在的には自らの思想そのものを問い直し、しかも、その問い直しが2000年以上に及ぶ伝統を形成してきたケースはおそらく多くはない。まさにこの自己反省の歴史を「哲学史」と呼ぶならば、そのうちに、あからさまに「哲学(史)とは何か」という問いを取り上げた人々のみならず、紀元前600年のペロポネソス半島に生きた賢人から、21世紀の世界各地に散らばっている「哲学研究者」までを含めることは十分可能である。

この見立ては、ヘーゲル哲学史から導き出しうる一つのミニマムな哲学史理解にすぎない。

¹⁴ しかし、まさに哲学の概念と哲学史との自己反省的で不安定な関係性ゆえに、哲学史は歴史的記述に徹すべきだとする立場もある。M. フレーデは近著の中で、現代の哲学的関心による「歪み」を避けるために、哲学史の「哲学的記述」ではなく、「歴史的記述」を再評価することを提唱している (Frede 2022, 124-125)。

それでも、やはり自己反省や自己知という「西洋近代」の基準を哲学史に持ち込み、再び古典的な「西洋哲学史」のみを特権的に扱おうとしているのではないか、ありうべき哲学史の多元化や複線化、拡張に抵抗しようとしているのではないか、などの疑念が突き付けられることは避けられないと思われる。それらの疑念に対して応答する紙幅は残されていない。ただし、少なくともこうした疑問そのものが、「哲学（史）とは何であるべきか」という問題圏に収まることは正当に指摘できるはずである。思想一般の歴史ではなく、あえて「哲学史」に何かを期待するならば、そこで *philosophia* を巡って生じてきた思考の歴史を無視することはできないのである。

いうまでもなく、今日、ヘーゲル哲学史をそのまま再興し、「哲学史の哲学」として通用させようとする試みは望むべくもない。しかし、哲学（史）を総体から規定しようとする哲学体系と関連付けられたヘーゲル哲学史は、「哲学史とは何か」を考える際に、今なお立ち戻らざるをえない参照軸であり、哲学史をめぐる旅の道標だといってよいだろう¹⁵。

7. おわりに——〈私たちにとっての哲学史〉に向けて

本論では、現代の多元化し拡張する哲学史記述という状況を前に、ヘーゲル哲学史のもつ限界と可能性を考察してきた。これまで見てきたように、哲学史の記述は、「哲学とは何か」についての何らかの理解を前提にせざるをえない。いってみれば、特定の「哲学」のパースペクティブのもとに、特定の人々を「哲学者」とみなし、特定のテキストを「哲学書」と呼び、哲学史を編んできたのである。そのかぎり、哲学史は、数学史や美術史などと比べて、独自の自己反省性を伴っており、それゆえに根本的な不安定さを免れることができない。「自己刷新する哲学史」を主張するヘーゲルは、そのことを見抜いていた。哲学史と哲学体系、歴史と論理との対応に固執していたのは、具体的な哲学史記述がその基準となる哲学そのものと切り離せないことを洞察していたからこそである。

このような哲学史理解は、畢竟、今を生きる私たちはいかなる哲学理解をもち、いかなる哲学的営みを行っているのか、そして、その理解は正当なのか、といった問いを投げ返してくる。その点において、ヘーゲルが哲学史を「我々の生成」と重ねているのは至極真っ当である。

我々が生み出すものは、本質的に現存するもの〔手元のもの〕を前提する。我々の哲学がそうであるところのものは、本質的にこの連関のうちでのみ現実存在し、この連関から必然性をもって生じてくる。〔哲学の〕歴史とは、我々にとってよそよそしい物事の生成を叙述するのではなく、こうした我々の生成を、我々の学問〔＝哲学史〕の生成を叙述する

¹⁵ 無論、このようなヘーゲル哲学史の位置付けは、哲学と呼びうる伝統が完全に立ち消え、まったく新たな人類の精神的営みが始まらないかぎり、という条件付きである。哲学とはいえ、人々の営みに他ならない以上、その可能性がないと断言することはできない。

ものである。(1820年講義概要、V6, 8-9)

ヘーゲルにとっての哲学史記述は、「理念」の哲学体系と同一視される「学問としての哲学史」の試みであり、ヘーゲルにとっての「我々の生成」を意味していた。だが、現在を生きる私たちにとっての哲学史記述は、当然ながら「ヘーゲル哲学史」とは異なっており、そこに見出される〈私たちの生成〉もヘーゲルが期待していたものとは異なるだろう。哲学史とは何か、何をどのように記述するべきか。これらの問いは、それを問う私たち自身に向けられている。

凡例

ヘーゲルの著作や講義録について、全集 (*Gesammelte Werke*, Hamburg, 1968-) に収録されているものはGWと略記し、巻数とページ数を記した。イエシュケ版講義録 (*Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskript*, 1983-) はVと略記し、巻数とページ数を記した。

参考文献

- Hegel, G. W. F. (1968-). *Gesammelte Werke.*, In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft herausgegeben von der Nordrhein-Westfälischen Akademie der Wissenschaften und der Künste. Felix Meiner.
- (1986-1996). *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*. Bd.6-9. Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. 4 Teile. Hrsg. von Pierre Garniron und Walter Jaeschke. Felix Meiner.
- 植村玄輝 (2017). 「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか——過去の主張についての規範的探求という観点からの提案」, 日本哲学会編『哲学』, 68, 28-44. 知泉書館.
- 荻野弘之. (2022). 「序章 哲学と哲学史」, 『新しく学ぶ西洋哲学史』, ミネルヴァ書房.
- 神崎繁・熊野純彦・鈴木泉. (2008). 「鼎談：哲学史研究の現在」, 『哲学の歴史』別巻「哲学と哲学史」(pp. 54-84), 中央公論新社.
- 柴田隆行. (1997). 『哲学史成立の現場』. 弘文社.
- 下田和宣. (2019). 『宗教史の哲学——後期ヘーゲルへの迂回路』. 京都大学学術出版会.
- 福谷茂. (2009). 「〈哲学史〉という発明」, 飯田隆他編『岩波講座 哲学』第14巻「哲学史の哲学」(pp. 27-48), 岩波書店.
- 藤田正勝. (2008). 「日本における哲学史の受容」, 『哲学の歴史』別巻「哲学と哲学史」(85-107), 中央公論新社.
- 三重野清顕. (2022). 「哲学史研究はどのようなものであるべき——ヘーゲルの哲学史論から考える」, 『ヘーゲル哲学研究』, 28, 56-68, 現代思潮新社.
- 八幡さくら. (2025). 「女性哲学者の不在が示す哲学史の問題：『女性哲学者たち』の紹介を通して」, 『シェリング年報』, 33, 82-92.
- Brucker, J. J. (1736). *Kurze Fragen aus der philosophischen Historiae.*, Siebender Teil, Ulm.

- Elberfeld, R. (2024). *Histories of Philosophy in Global Perspective*, Reinhart Koselleck-Project, April 1st, 2019-March 31st, 2024,. Funded by the German Research Foundation (DFG), <https://www.uni-hildesheim.de/histories-of-philosophy/>
- Frede, M. (2022). *The Historiography of Philosophy*. Katerina Ierodiakonou (Ed.), Oxford University Press.
- Geldsetzer, L. (1968). *Die Philosophie der Philosophiegeschichte im 19. Jahrhundert*. A. Hain.
- Jaeschke, W. (2003). *Hegel-Handbuch: Leben – Werk – Schule*. J.B. Metzler.
- Nassar, D. and Gjesdal, K. (2021). *Women Philosophers in the Long Nineteenth Century. The German Tradition*. Oxford University Press.
- Pöggeler, O. (1993). *Hegels Idee einer Phänomenologie des Geistes*. Karl Alber.
- Reinhold, K. L. (1968). Über den Begriff der Geschichte der Philosophie. In *Beiträge zur Geschichte der Philosophie*. 1-3 Stück. Hrsg. von Georg Gustav Fülleborn (Aetas Kantiana; 77), Culture et civilisation.
- Rorty, R. (1984). The Historiography of Philosophy: four genres. In R. Rorty, J. B. Schneewind and Q. Skinner (Eds.), *Philosophy in History: Essays in the Historiography of Philosophy* (pp. 49-76). Cambridge University Press.
- Schwegler, A. (1868). *Geschichte der Philosophie im Umriß*. Franckh.